



線はくうきをつくる



面を掛ける



そこにいる



踊り口



見えないことに対する恐怖はやはりある

しかし見えないことによって感じられる感情は恐怖だけではない

私は「それ」を愛おしく感じる

おそらく私は「それ」を一つの存在として認識しているからだろう

見えないモノは確かに存在しているのだと私はそう感じた

かそ
幽けき 確かにそこにいるが知覚できないモノ

「和」は、そこにいてそこにいないもの。ある瞬間にだけ知覚できる一つの現象のようなもの。「わっ」と声に出してみるとどこか消え入りそうな、そんな存在。私は、その「和」の在り方が幽霊のようだと思った。今回は、その「幽霊」をモチーフに茶室を設計する。茶室というのは、俗世から離れた世界、すなわち同じ世界に存在はしているが普段は見えないことを指す。そのため今回の「和」の表現に適していると考えた。私は「それ」をモノ、作法、動作により生まれるふるまいや気配の輪郭と定義し、茶室としてその輪郭を線としてただ立ち上げる。その在り様が「幽霊」とはまた違う「幽けしい」存在、すなわち「それ」となる。